

呉や大竹 震度5弱

伊予灘震源M6.2



2014.3.15 中国新聞の記事の
てり抜

中国電力によると、松江市鹿島町の島根原子力発電所は1、2号機とも運転を停止しており、異常はなかった。四国電力によると、基準地震動(耐震設計の目安となる地震の揺れ)は570ガル。今回、伊方原発1、3号機で感知されたのは45〜56ガルで、異常はなかった。

気象庁の発表では、震源地は伊予灘で震源の深さは約78キロ。地震の規模はマグニチュード(M)6.2と推定される。津波はなかった。

「南海」起こす 引き金の一つ



金折裕司教授

地震のメカニズム

山口大大学院・金折教授

南海トラフで近い将来起こるとされる巨大地震の前触れなのか。伊予灘を震源として14日未明に発生した地震で、山口大大学院理工学研究所の金折裕司教授(構造地質学)は「すぐに南海地震を引き起こすわけではないが、2001年の芸予地震と同様に南海地震の引き金の一つ。その発生を早めたと考えてよいのではないかとみている。(馬場洋太)

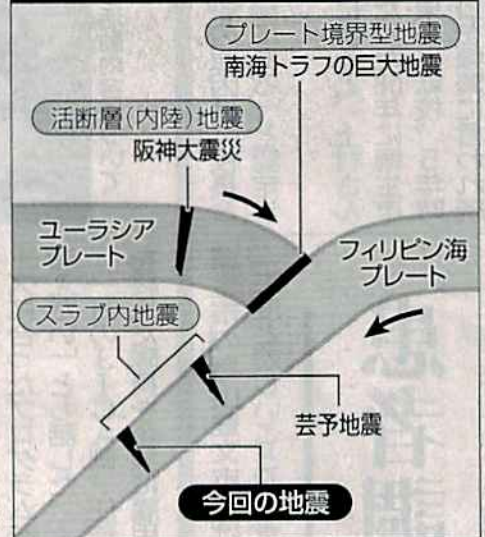
金折教授は今回の地震を、芸予地震と同じ「スラブ(岩盤)内地震」だと指摘する。ユーラシアプレートの下に潜り込んだフィリピン海プレートの先端近くで、断層にずれが生じたとみられる。ただ、震源の深さが芸予地震の46キロに対し、今回は78キロと深い。地震のエネルギーは芸予地震の6分の1だったこともあり、被害が軽かったという。南海地震や東日本大震災のようなプレート境界での巨大地震が起こる際は、上のプレート内での「活断層(内陸)地震」と、下のプレート内での「スラブ内地震」も前後して起きるといふ。

阪神大震災(1995年)は活断層地震で、これにより西日本は地震の活動期に入ったとされている。スラブ内地震は「歴史的にみると南海トラフで起こる巨大地震の数十年前に起きたケースが目立ち、01年の芸予地震は次の南海地震の前触れと考えられる」と金折教授は「次は20〜30年以内の



授。芸予と同タイプの今回の地震で「南海地震にまた一歩近づいた」とみる。過去400年の3回の南海トラフ巨大地震は92〜147年の間隔で起き、1946年の昭和南海地震からは68年たっている。金折教授は「次は20〜30年以内の

今回の地震と南海トラフ巨大地震の関係



可能性が高い」と言及。「夜中に揺れた今回の経験を生かし、寝室に倒れやすい物を置かないなど防災意識を高めるきっかけにしてほしい」と呼び掛けている。